

三如来坐像

来迎院の内陣（内部の聖室）の3体の仏像は、もともとは大原の他の仏教寺院で崇拝の対象となっていたものだ。それらの寺はすべて、室町時代（1336～1572年）によく発生していた火事で焼けてしまった。

3体の像はそれぞれ破損を免れ、来迎院に持ち込まれた。

3体の「本尊」は、薬師如来、釈迦如来、そして阿弥陀如来である。これらはすべて重要文化財に指定されている。3体ともに漆塗りの木像で、平安時代（794～1185年）につくられた。当時の芸術の特徴である優雅さと繊細さを示している。

この3体の仏は、それぞれ現在、過去、そして未来を司っていると考えられている。

3体の本尊の両隣には2体の「脇侍」が控えている。すなわち左には不動明王、右には毘沙門天である。どちらの像も平安末期の作である。

来迎院は、天台宗最古の寺です。寺院は9世紀に建てられた「声明」（仏教の吟誦）の稽古場であり、円仁は遺名慈覚大師（794-864）でよく知られています。

この寺院はその後、1109年に聖応大師良忍（1072-1132）によって修復されるまで使われていませんでした。もともと比叡山の僧侶であった良忍は、来迎院での「声明」の音律を復活させました。

広大な寺院の建物は1426年11月に火事で消失しました。現在の「本堂」は16世紀に建てられたものです。